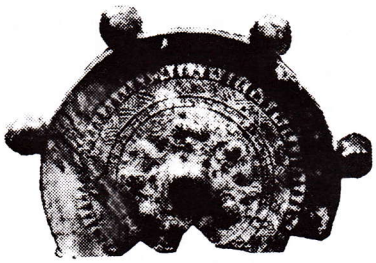
第 27 号　　平成14年6月1日

文化財やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

創立三十年 記念事業を実施して

会長　佐藤光一

会長を仰せつかった年が、本会創立三十年目に当っているということで、早速何か記念になる事業を計画しようということになりました。

会員百七十名を擁する本会三十年の歴史は、会を挙げて文化財の保護およびその思想普及のための、地道な努力の積み重ねであり、我々各会員の誇りとするところであります。

しかし一方で過去の栄光に浸ってばかり居られない現実もあります。即ち会員の高齢化と、ややもすると事業参加への主体性の欠如ということです。そしてそれは会運営のマンネリ傾向が生み出したものであるとも言えなくはありません。

記念事業の策定に当っては、事業の恩恵が全会員にあまねく及び、それが当協会活性化の一助となるようにしなければならないと考えました。

あれこれ検討のすえ。卿土の地図と指定文化財を結びつけ、何処にどんな文化財があるかをはっきり認識できるようにしようと考え、その方法について佐藤薫氏（当時役場基盤整備課課長補佐）に助言を求めました。氏は早速その筋の専門家である（株）大興計測技術の坪井晃社長を紹介してくださいました。社長は大和町の地図上に文化財所在地・文化財名を落とし、地点と文化財の紹介とを結びつけるいわゆる「地理情報システム」によるホームページ作成（ブロードバンドが利用出来ない現在、CDに収録することにする）を提案されました。それに基づいて概要をまとめ、総会の承認を経て、地図上の地点の確定・解説・写真等を準備することになりました。

作成に当っては、次の三つの視点を掲げました。

一、町民の皆さんが大和町の文化財への理解を深め、文化財を通して過去と出会い、大和町のよさを肌で感じていただけるようにする。

二、文化財を通して広く大和町をアピールする。

三、これを大和町文化財保護協会の活性化の契機にする。

そして、これを実現するために、次のことを念頭に置きました。

① 知的好奇心を満足させるような、魅力的な構成にする。

② 解説を充実させるとともに、できるだけ多く写真を用い、親しみやすいものにする。

③ 解説文には出来るだけルビを振り、読み易くする。

約半年の時間と町史編集委員を中心に大勢の会員の努力によって、CDが完成したことは、誠に喜ばしい限りであります。

記念事業への取り組みの中で、会の当面する課題解決のため次のことに取り組みました。試みに記念事業委員会・研修旅行委員会・機関誌編集委員会の三委員会を設け、三十人の理事がいずれかの委員会に所属し、主体的に取り組もうとしました。

年度当初の計画になかったことでもあり、必ずしも徹底はしませんでしたが、次のような成果をあげることが出来ました。

① CDが完成し、町民祭で盛大に上映会を持つことが出来た。

② 秋の日帰り研修、三月の長野県文化財探訪の旅が、単に執行部の提案を実施に移すのではなく、委員会の研究・提案によって、有意義に実施できた。

③ 機関誌編集が、少数とは言え委員の手によって、スムーズに行われ、魅力的な編集ができた。

来年度はさらにこれを推進し、各委員会がその責任において、それぞれの事業を計画し、提案・実施できるようにしたいと思います。そして、行く行くは規約を改正して、必要な委員会を組織し、全会員が明確な目標を持って、生き生きと活動できるようになればと大いに期待しています。

今改めて 東氏居館跡に立ちて思うこと

土松 新逸

東氏居館跡は、昭和六四年六月牧地区のほ場整備工事中に発見され、翌五五年～五八年にわたり第一次発掘調査が実施されたことは周知の通りであるが、大和町（当時大和村）にて発掘調査が本格的に実施されたのはこの東氏居館跡が初めであり、何かとたいへんなことであった。幸い各関係者のご協力と多くの方々のご努力によって着々と進み、東氏が篠脇在城二三〇余年間の文化的生活の裏付けとなる数多の輸入陶磁器や宋銭をはじめ高級な陶器類、木製品、石製品、金属製品など四万点以上に及ぶ膨大な出土品があり、東氏文化を知る上に貴重な資料を得ることができたのであった。

殊に、ほぼ完全に五〇〇余年前の姿を残している池泉を中心とした庭園遺構の検出は全く思いがけないことであった。中島を配した優雅な池泉部は風情まことに素晴らしく、中世武将の館跡庭園として昭和六二年に国の名勝に指定されたのであった。

発掘調査前は、あの辺りは大きく二段の水田であったが、上段と下段は一メートル以上の段差があった。庭園すなわち池泉遺構の検出されたのは上段に属する部分であった。ここが検出されたのは調査第一年の八月～九月ころであったが、最初池の東南部に変った石組が検出されたときには何であるか全くわからなかった。掘り進むに従って池泉の護岸であることがわかり感激したことであった。少し進み、中島らしい石組が検出されたころ京都の日本庭園研究所次長村岡正先生がふっと来られ、「これはすばらしい庭園遺構だ、他のまねをしたようなものではない、ちゃんとした指導者が来て出来たものだろう」と感心しておられた。それからしばらくして、文化庁の牛川調査官が、京都博物館考古学室長八賀晋先生、岐阜大学教授野口忠男先生、奈良国立文化財研究所加藤充彦先生等の先生方も見に来られ、この庭園遺構のすばらしさに驚かれたのであった。

東氏館跡がわかり、こんなすばらしい庭園遺構がこんな所に眠っていたとは誠に思いがけないことであり、古今伝授のこともここで行われとことがうなづけるのであった。

翻ってこの発掘調査に暑い日も寒い日も一所懸命手伝って下さった方々を改めて思い出すのであるが、牧区から一九人、名皿部から四人、古道から三人、徳永・河辺から各一人計二八名であった。最初は発掘調査のことなど全くわからず戸惑うことも多かったが、日を重ねるうちに慣れて、出土遺物名なども覚え「アッ天目茶碗だよ。」などと笑い声が聞こえるようになり、行程も進むようになった。また出土遺物の整理（水洗いして乾かし、小さな破片でも一個毎に出土年月日、出土箇所、出土番号等を細い毛筆にて記入する「ネーミング」作業）の出来る人も何名か出来てありがたかった。

今静かにおもうと二八名のうちもう一二名が物故されておられ、その方々の面影がほうふつとし、改めてご冥福をお祈り申し上げるものである。

しかしうれしいこともある。共に東氏居館跡の発掘調査に精出した記念に一緒に勉強しましょうと、昭和五六年四月「篠脇短歌会」を始め、今に続いていることはほんとうにうれしくありがたいことである。

東氏居館跡が発見され、発掘調査がなされ、すばらしい庭園遺構が検出され、「国の名勝」に指定されたことにより、これを中心として、「古今伝授の里フィールドミュージアム」が開設され、「文化の薫り高い町大和町」がますあす発展してゆくのを見つめ、「中世の夢の跡」がいよいよ栄え行くことを祈るものであります。

（写真は調査中の池泉遺構）

委員会報告

記念事業委員会

総会の決議により、執行部で原案を作成し、七月一一日（月）の役員会で「GISによる大和町の文化財」作成が決定された。

それを受けて、㈱大興計測技術との間で次のように契約が交わされた。

一、七月末迄に個々の文化財を大和町の地図の上に落とす。

二、八月二〇日までに解説文の作成を終える。

三、一〇月上旬に完成させる。

四、費用は五〇万円とする。

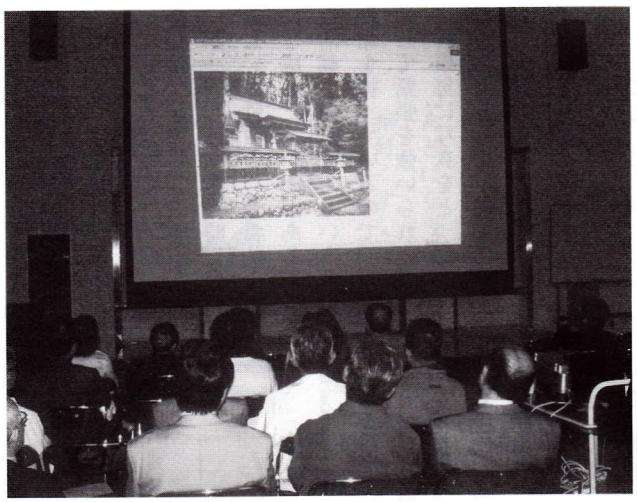
予定通りに作業が進み、一〇月一五日には、町長さんを始め各界の代表者二二名の方々を招いて、役場防災研修室で試写会を開く事が出来た。

さらに手直しをして、一〇月二七日～二八日の町民祭に合わせて発表会をもち、多数の町民に観覧してもらう事が出来た。

その間数度に亘り委員会を持ち完成に向けて一致協力した。

完成したCDは、町内各機関を始め県下の関係二四団体に寄贈し、希望会員に配布した。

なお、今後とも希望会員に配布できるように手配ができている。



「大和町の文化財」試写会風景

研修旅行委員会

新年度新しい試みとして研修旅行委員会が設けられ、これまで執行部から提案された原案を理事会で承認して実施してきた研修旅行を、研修旅行委員会で計画立案・提案して実施する事になった。

第一回委員会は十月九日に持たれ、実施期日十一月八日、見学場所として京都大報恩寺（別名千本釈迦堂、国宝の本殿・重文の六観音立像・釈迦十大弟子立像など）、蓮華王院本堂（別名三十三間堂、国宝十一面千手千眼観音坐像＝中尊、風神・雷神と二十八部衆、重文千体の十一面千手千眼観音立像など）、京都国立博物館（仏教美術を中心に、考古・陶磁器・彫刻・絵画染色・書道・漆器など）を計画立案して、十月十五日の理事会で承認され、実施した。参加者三十五名、河合俊次先生のご案内もあり、素晴らしい研修が出来た。

一泊研修のための委員会は、二月十五日に持たれ、聖徳太子展（名古屋市立博物館）の見学を含む奈良・京都の古寺探訪という声もあったが、文化協会が既に聖徳太子展の見学を計画し、会員募集を始めているとのこで断念した。いろいろ検討した結果、滝日準一委員の提案で、これまで一度も行ったこのない信州の文化財を尋ねる案をまとめる事になった。資料により、上田・小布施を中心に見学し、宿泊は上山田温泉と決まった。さらに検討を進め、第一日は、国宝・松本城（松本市）、（昼食）、前山寺・重文三重塔、中禅寺・薬師堂、安楽寺・国宝八角三重塔（上田市）、戸倉上山田温泉（泊）。第二日は、川中島典厩寺記念館、真田宝物館・真田邸・文武学校（以上長野市）、（昼食）、葛飾北斎館、高井鴻山記念館、おぶせミュージアム、岩松院・北斎「八方睨み鳳凰図」、（以上小布施町）等々を見学し、上信越道、北陸道、東海北陸道を経

三十三間堂中尊（国宝）

て帰着する計画を立案し、実施日は三月二十四（日）、二十五（月）として、二月二十五日の役員会に提案・承認を得て、会員募集に取り掛かった。

その後、河合俊次委員が、「長野へ行くなら、ぜひ須坂市の豪商の館・田中本家博物館を見学すべし。」の情報を得られ、急遽「高井鴻山記念館・おぶせミュージアム」を割愛し、須坂市の豪商の館・田中本家博物館を見学先に加えた。

募集締切日を過ぎても、計画通りの応募がなく、一時は実施が危ぶまれたが、三月二十日を最終決断の日と決め、委員が鋭意募集活動を行った結果、四十二名が集まり、実施を決定した。（いろいろの事情から最終参加者は三十九名）。

第一日は、決して好天とはいえなかったが、予定どうり素晴らしい研修ができた。第二日は、前日と打って変わって、快晴となり、研修は勿論だが、日本アルプスを我が家の庭の如く熟知して居られるガイドさんの解説で、素晴らしいおまけがついた。

会誌編集委員会

昨年までは執行部が編集に当ってきたが、初めての試みとして、委員会で編集に当る事になった。

年一回だけ、総会時に発行するという性質上、恒常的な活動には成りにくい面があるが、本会活動を記録するという重大な使命を担っているので、年間を通して緊張を強いられた。

行事毎に写真をとったり、記録をしたりして、編集に備えたが、委員会としては、会員の寄稿に重点を置く方針の下にことに当った。

それでも、この頃よく会の活性化ということが言われているので、それに一役買うことには常に留意した。

その一つとして、全会員を対象に会の活動に関する意見・希望・提言などを求めてアンケートを実施した。その集約は別項に掲載した。

多くの会員から寄稿していただき、始めてとしては満足している。この体験を生かして、次回からはさらに充実した会誌にしたいと念願している。

一つの出合い

河合俊次

「文化財」という言葉は今日でこそ当たり前のように多く使われているが、人によっては生活とも程遠く堅苦しさも手伝い、何か縁遠い言葉であると考える方もあるかと思っている。

実は私自身も若い頃はその一人で、所謂古美術品等には興味も薄く接することも無かったと記憶している。しかし確か四十歳位の頃かと思うが、たま〳〵所要のため東京上野まで行ったことがある。その節帰りぎわ上野駅近くの商店街を歩いていた時、偶然何処にもある例のガラクタ屋の店先に金属製の小さな仏さんがチョコンと飾ってあるのが目にとまった。初めは全く興味も抱かなかったが、立ち止まって見ているうちに、何となく入ってみたくなって、店の中に入って行った。結果的にはその時とう〳〵それを手に入れることになってしまった。勿論仏さんの国籍も年代も全くわかってはいなかった。その時偶然上野駅裏の上野公園内には東京国立博物館のあることを思い出した。で早速その足で博物館へ行き、紹介も無く専門の先生を受付で聞き、直接逢い事情を話してその教えを乞うた次第である。でも有難いことには先生は持参の仏像を見て、中国の明末清初の鉱金銅仏で観音菩薩さんであると懇切に教えてくださった。

さて観音さんを手にしたものの、観音さん以外の仏さんについて全然わからず、結局はこれに関連する本を求め、仏像の歴史、各部の名称、時代の見極め方等を学ぶこととした。

このようにして年を追うたびに次第にこの世界に飛び込み、次には関西の古寺へのお詣り、関係展覧会の見学等々、やればやる程に楽しさが倍加して行った。さらには古画や陶磁器、茶道具への興味も持つようになり、これらのお蔭で多くの全く違う世界の人々との交流も持つようになり、人生生活も一層楽しく豊かなものになってきたのである。

特に私の人生経験で最も印象的で心に焼きついたのは美術館の建設であった。公立資料館一、私立美術館二、計三館の建設、資料蒐集、鑑別、展示、運営等に携わり、それらには何れも二～三年を要し、完璧を期さねばならなかったが、幸い何れも自らも満足出来得て、とても嬉しい思い出となることとなった。

「文化財」というと大変難しく聞えるが、どんなものにしても一つのものを見つめ、愛し、解きほぐして行くことによって、そこに素晴らしい世界を見、知ることが出来る。私たちはその生活の中で、或いはその周辺で物を見つめることによって、文化財入門を果たすことが出来るのではなかろうか。

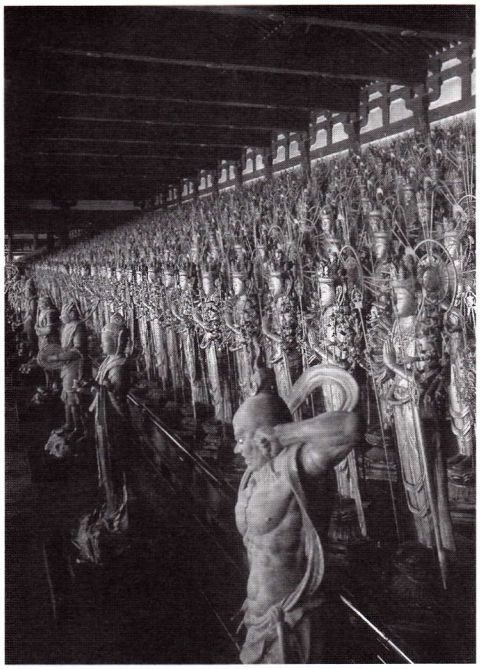
観音さん
日帰り研修に参加して

有代　眞一

観音さんは、幾つかある仏さんの中で、もっとも多くの民衆に親しまれている仏さんといっていいだろう。その呼び名も、何か親しみ易くいい響きがある。日本での観音信仰はいつ頃から始まったのだろうか。少し調べてみると、随分と昔にさか上ることが分かる。それは仏教渡来の直後に始まり、日本仏教史を通じて現在にまで及んでいる。

飛鳥時代には法隆寺の百済観音、同夢殿の救世観音をはじめ、現存する仏像中でも観音像が最も多く、その信仰が法華経の伝来とともに急速に広がったことを物語っているといえよう。そして、奈良時代を経て平安時代になり、いよいよその傾向は強まったようである。それは造像写経はもとより、観音を本尊とする寺院も数多く建てられているからである。唐招提寺の千手観音、大和長谷寺、京都清水寺、近江石山寺、興福寺南円堂、紀三井寺、今回参観した蓮華王院（三十三間堂）などである。

京都東インターを降り市内に入ると、やはり多少の渋滞に合う。予定より少し遅れ、午前十一時近くに大報恩寺につく。それにしても京都も近くなったものだ。この山奥から、四時間もあれば裕に来れる。正面右側の高い石標に大きく「千本釈迦堂」と彫ってある。正面に京都で最も古いといわれる本堂（国宝）の屋根が見える。私達は霊宝堂に安置されている六観音（重文）を拝観する。六観音とは、六道（地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道）で苦しむ亡者を極楽浄土へ導く観音さんだという。説明を聞きながら、一つ一つの観音さんを拝観していく。聖（ひじり）観音は、地獄道へおちた亡者を救う観音さんだという。左手に蓮のつぼみ花を持ち、右手で優しくかばい、表情は穏やかで慈悲深い。千手観音は、餓鬼道へ落ちた亡者をいろんな手法で救済するという。馬頭観音は、畜生道へ落ちた亡者を救うといわれ、その表情は他の観音さんと違い、いかにも恐ろしく怒っているようである。厳しく戒めているのだろう。十一面観音は、争いや戦いで修羅道へ落ちた亡者を救うという。頭上に十一の仏様が置かれている。准胝（じゅんてい）観音は、人間道の亡者を十八本の腕で様々の苦悩を救うという。如意輪観音は、天井道の人の悩みを救うという。おもしろいことに天上界のおいても人は老い、人としての苦悩は絶えないということだ。右ひざを立て、もの思いにふけっている姿は、いかにも知恵の仏さんという感じがする。いずれにしろ、六観音という種々なる姿に変身して、あらゆる人の苦しみや悩みを救い、願いを受け止め、現世の安らぎを生み出しているのだ。又彫刻美術としてもすばらしく、当時の仏師の技に敬服せざるを



三十三間堂本堂

三十三間堂にて

得ない。

昼からは、蓮華法院（三十三間堂）の千体観音立像を拝観する。中央の巨像（中尊・国宝）を中心に、左右にそれぞれ五百体（重文）合計千一体の観音さんが整然と並んでいる様には圧倒される。なぜこんなにも莫大な数の観音さんを造像し一堂に祀ったのだろう。時の権力者清盛がその権威を示し、数による救済と願いの効力を高めんがためだったのだろうか。庶民の観音さん信仰としては縁遠いように思われる。庶民の観音さんは、やはり長谷観音さんだったり、西国三十三所観音堂巡礼だったりしたのであろう。身近な観音さんで、手を合わせるだけで、現世の苦悩を聞いて頂ける。それが観音さんの信仰の原点なのだろう。

このあと、ヒューマン・イメージをテーマにした特別展覧会を京都国立博物館で見学して帰る。

今回も、日帰り研修のおかげでいろんなことを学ばせて頂いた。なかなか頭に残らないが、その場その時の感動感激で終わりがちだが、それでもいいと思っている。残り少なくなっていく現世を、瞬時であっても安らぎが得られれば幸いだと思いたいからである。これからもこうした機会にぜひ参加させて頂きたいと思っている。

長野県文化財視察に参加して

本川　喜代士

K先生、この間は結構な旅に参加させて頂き、本当に有り難うございました。拙い文で感想を取り纏めさせて頂きましたが、お礼の気持ちになりますでしょうか。

駐車場から松本城への道すがら、小さな古本屋で、七十年前の掘り出し物を手に入れました。川端康成の短編集「富士の初雪」、箱入りでしたが信じられない安い値段でした。今度の長野旅行は、文字通り千曲川のスケッチ、藤村を彷彿とされ、「初恋」の林檎畑はどのあたりだったのだろう、そんなことを考えたりもしました。でも、一番強く印象に残ったのは、遠景に真っ白く輝くアルプスの山並みでした。井上靖の「氷壁」の世界です。

東京のNTTを定年退職し当地に移り住んで約七年、これまで何度かバス旅行に親しまさせて頂きましたが、今回の旅は、これまでとはひと味違う素敵な体験でした。

早朝、車の前面ガラスに凍り付いた雪を払い落とす暇もなく家を出たのですが、松本城では快晴、階段のアンバラが気になりましたが、天守閣からの眺めは八幡城とは違う歴史の重さを感じました。昼食をとった第一会館の壁に、棟方志功の書が飾ってあったのは、皆さん気が付かれたでしょうか。三重塔が有名な前山寺では、茅葺きの本堂も趣のある建物で、ご本尊の大日如来もしっかり拝まさせて頂きました。

この日のメーンは、やはり安楽寺の国宝・八角三重塔。数百メーターの坂道を上り何十段かの階段に、息切れした人は多かったと思います。怪しい空模様が雪に変わり、そういう中で眺めた三重塔は、歴史ある建物が風雨に晒されるのが可哀相なような、平泉の中尊寺の様に建物かドームで被ってあげたいような愛しい感じでした。

翌日はガイドさんも感心したような天気、遠くの南アルプスや越後の純白の山脈が鮮やかでした。川中島典厩寺、手慣れたお坊さんの説明でしたが、閻魔堂の素朴な天井画と、門前の土手近くにあった道案内の旧い石碑が印象に残りました。真田邸はボランティアの説明振りが気に入りました。足が不自由なご

前山寺三重塔（重文）にて

様子なのに、明るい振る舞いとユーモラスな語り口に微笑まされ、「何時までもお元気で！」と別れの時、目で挨拶させて頂きました。すぐ隣の公園に、子供の可愛いブロンズ像があったのを見た人は少なかったと思います。豪商の館・田中本家博物館、お雛様はあでやかでしたが、私には伊万里や古九谷の陶器と独特な庭園の美しさに目を奪われました。

初日の前山寺から典厩寺まで、バスが通るのに困難な道を運転されたドライバーには、頭が下がりました。同時に、旅行家さんを始め幹事の方々の今回のスケジュールプランは、見事だったと思います。でも今度の旅行で一番感激したのはガイドさんの説明振りでした。

最近のバスガイドさんは、ワンパターンの名所案内調から脱皮して、個性を重んじる様なガイド振りですが、今回の方は群を抜いていたように思います。木曽川河川敷の満開の桜から始まって、ご自分の住まいの御嵩町近辺、通り過ぎる沿線での説明は、静かな口調と流れるような話しぶりに聞き惚れてしまいました。中でも帰りの北陸道で、二十六の隧道を通りながらの親不知や翡翠海岸の案内、北アルプスの各峰嶺の説明は目と耳に焼き付いて居ります。どのガイドさんも最後に挨拶されます、「またの機会をお願いします。」その挨拶をそのままお返ししたいような素敵な人でした、「後藤和代さん」です。

安楽寺八角三重塔（国宝）

「かけた情は水に流せ、受けた恩は石に刻め」こういった石碑などの文字を一つひとつメモしていた人、カメラを三つもぶら下げ最新のデジタル機器の取り扱いに懸命だった方、ご自分で勉強された塔の資料を皆に配ってくれた人、そして勿論先生も何度か説明をされ重要文化財と国宝の数をしっかり覚え込まされました。そんな中で、ガイドさんと共に私が驚かされたのは、九十才を超える方が何人も居られた事です。九十三才の現役指揮者として、ベートーベンの交響曲全曲演奏を、九回も成し遂げられた朝比奈隆さんが、この間、残念な形で話題になりましたが、今回のこのきつい行程に、何事もなく取り組まれたこの方々に、人生の指針を見る思いでした。文化財保護協会は人材の育成、保護にも手がけて居られる様な気がして、私は大和町の住人になった事を、しみじみ嬉しく思います。

『癌告知のあとで』を読んで

村瀬弥一

故東井先生、同章子様、本当に有難うございました。

仏法は現世浄土への「パスポート」として頂くとともに、瞬間に過ぎ去り、再びこの私の前に訪れることのない大切な「今」という時間を「おねんぶつ」のなかに力一ぱい活々として生かされなければならない事をよく理解させて頂きました。しかもその活々としていかされるという事は、人間として誰しも望むところの「真の幸せ」を求めるよすがともなるものと思います。

財貨、地位、名誉、家庭内の円満、他人との好ましい関係、更には健康までも、みんな何時の日にかは、悪条件に見舞われた時、ガラ／／と毀れ去っていきます。

幸せと思いつかんでいたことが、うつろいでゆく仮の幸せであって、本物ではなかったのでありました。

真の幸せとは、悪条件や、急激な変化が私の前に立ちふさがろうとも、決して動ずることのないものとの事もほぼ分からせて頂きました。

不幸となり得べき悩み、苦しみ、悲しみなども、宿業と諦めるのではなく、又逃避するのでもなく、素直にうなずき、真正面から宿業をこの身心で引受けて果たさせて頂き、立ちはだかる壁を乗り越えて生きるものであると受け止めさせて頂けました。

そんなみ教えが仏様の説かれる所でございましょう。

私たち人間すべて、願わずとも又頼まずとも人間として生を

享けました。しかもその出て来た処が真宗の流れを汲む家でありました。気づくのが余りにもおそかりしことが悔まれますが、賜りたるこの命を大切にして、生活の中に仏法様を取りこませて頂き、日々を喜びと感謝の中に悔いのない余生を完うさせて頂きたいと思います。

章子様本当にありがとうございました。

思いのままに

小池久江

—藤村の足跡を訪ねてみたい。それは、私のたった一つの長い夢でしたが、実現することもなく、半世紀が過ぎた。

戦後の教室で、新聞紙の様な印刷物が配られ、ページを間違えない様に僅か三十頁余りの冊子が国語の教科書であり、藤村の「若菜集」、「落梅集」、「千曲川のスケッチ」の中から選ばれた詩の一部。野田先生が、「自分の好きな所を暗誦して来なさい。」と言われ、好い詩ばかりなので迷いながら、私は、序文「遂に新しき詩歌の時は来りぬ…」と、あれ以来の夢なのである。五年生のときに教わった、「高楼の詩」も、後から思えば藤村の詩であった。

此度の研修旅行が信州であると聞いて、内心大喜び。あそこまで行けば、何かに触れる事が出来よう。地図を拡げ、もう少しこの辺からだったら、な—んて独り言。一週間ほど前から足をいためていたので心配はあった。でも歩けなかったらバスの中、と心に決めて、欲と、意地で何とか皆さんについて行く事が出来た。

多くの見学コースは、始めての所ばかり。心に残る好い旅であった。松代に真田宝物館を訪ね、広い空間、ゆったりと宝物が並び、又文武学校は近年まで使用されていたとか。大和町にも、この何分の一でもいい、文化財収蔵庫があれば、小さな部屋で眠っている宝物の目が覚めるであろうに。長野は古くから教育熱心な地なのだと思う。

町は至る所に、石仏、歌碑等。その一字一句を、ゆっくり読む間もなく、次の見学場所へ移動する間に右から左へと頭の中から消えていく。初日の終り、高い石段を足をいたわりながら登る。遠い昔、愛染かつらのしおりをいただいた事があった。何処の物であったか定かではないが、物思いしながら、愛染堂に手を合わせて帰り、やっとの思いで宿に足を休めることが出来た。

翌朝、食事前の一刻を、千曲川にかかる万葉橋の袂に立って、—千曲川いざよふ波の・・・と藤村の歌を心の中に、野田先生を偲び、暫し歌に酔いながら河川敷を歩む。早朝の川面に釣糸を垂れている赤いジャンパーの人。川柳は、まだ浅い芽吹きが白く煙って見える。

川波のいざよふ見れば、砂まじり水巻返る—八ヶ岳を源としてこの千曲川は、雪解け水も増してか、水底から沸き上がって巻き返っている。昔から同じ風景なのであろうか。向こう岸に鷺かしら、白い鳥が二羽動いているのが見える。何が釣れたのだろう、さっきの釣り人の糸の先に、キラリと光った。どんな魚が住んでいるのかな—

千曲川柳霞みて春浅く水流れたり、ただ一人岩をめぐりて、この岸に愁いをつなぐ・・・

何の鳥か知らねどこの広い川面を鳴いて渡る。河川敷は何処も同じ草が緑なして美しい。時間を気にして川岸から土手に上り、途中駐車場を横切り、佐久屋と言う旅館の前を通る。ふと足元に、きれいな松ボックリ。思わず手にしたが、何の意味もない。静かな朝の温泉街である。

朝食後、売店を一巡りして今日の日課が始まる。

それぞれ予定の見学場所は印象深くすべて満足。

帰路のバスは、私たちこの会に参加された全員に、素晴らしい景観を与えてくれた。聡明なガイドさんの、何十回もこの地を訪れたかの様な説明、案内に感心。そのまま録音したい程であった。素的なガイドさん。

右手に五万人収容できるとか、長野のオリンピックスタジアムの変わった建物（因みに建設費が三九六億円とか？）ガイドさんの受け売り。

善光寺平、千曲川と犀川の合流地点が彼の有名な川中島古戦場跡とか。「夏草や兵どもが夢の跡」かな。車内から鞭声粛粛夜川を過る・・・と聞こえて来る。

楢山節考、姨捨、棚田、田毎の月（小学校の運動会で上級生が遊戯をされたことを思う）。

飛騨、木曽の山脈、三千メートル級の日本アルプスの山々が連なり、この季節にしか見られない気高い美しさを満喫。青い空、雪山、新緑と見事なコントラスト。信州から新潟へと山の位置も替る。千曲川は新潟へ入って信濃川と名を替えた。

信濃なる千曲川の小石も君し踏みてば玉と拾はむ、万葉集。

白馬山麓の姫川より出る翡翠、ヒスイ海岸、宮崎海岸と何時か日本海を右に見て、北陸道の難所と言われる、親知らず子知らずを経て、魚津、滑川、富山と大廻での帰路。信州からず—と白い山。立山連峰まで堪能した。

富山の山脈が遠くなり、チラホラ灯の見える富山の町で夕食を済ませ、もう家まで眠って行くだけ。夢の中でも、千曲川が豊かに流れ、古い塔が浮かび、日本アルプスの白い峯々が続き、この旅を企画して下さった方々に好い思いをさせて頂き感謝している。もう一度、夢のつづきを見よう。実現出来なくてもいい。又縁があるといいなあ—。

会の発展を期して

アンケートの集計

本紙「文化財やまと」編集委員会では、会員の皆さんのご意見を紙面に反映させ、会の発展に役立てたいと願い、アンケートをお願いいたしましたところ、お忙しい中、たくさんのご意見・ご感想をお寄せくださいまして有難うございました。同じようなご意見が多かったので、集約して短文で纏めてみました。

一、大和町文化財保護協会の活動に対するご意見をお聞かせください。

- 文化財を保護していくのは私たち町民であると自覚し、古いものを大切にすること。
- 会員以外の方にも私たちの活動に対する理解を得る機会を作る。
- 町民大学等で「郷土を知る」講座（仮称）のような、故事を聞き、勉強ができる機会があったらよいと思う。
- 協会に対する町民の認識が浅いと感じられる。
- 町当局の認識が足りないのか、貴重な歴史・民俗資料が旧教室の中で眠っている。歴史資料収蔵展示館について、何ら方向も出されていない。これの実現に向かって働きかける事を考えたい。
- 大和町文化財保護協会があることは、物を大切にする意味でも大変よい事だと思います。役員の方いつもいろいろ有難うございます。
- 創立三十周年記念事業のCD発行は最高。

二、当協会は、総会（講演会）、機関誌「文化財やまと」の発行、東氏館跡庭園・千葉城跡の清掃奉仕、日帰り研修、一泊研修などを実施しておりますが、あなたはどのようなことを実施したらよいとお考えですか。

- 清掃奉仕等、各行事にもっと多くの会員の参加を呼びかける。
- 日帰り研修をもっと多くし、会員のふれあいの機会をもっと増やすとよい。
- 「文化財やまと」を手作り的で、あまり高度なものにならず、もっと親しみやすい、お金をかけない冊子にして、気軽に意見が寄せられるようにするとよい。さらに、発行回数を増やす。配布された機関誌は大切に保存している。
- 機関誌に斬新さがない（例えば、研修後の感想が一定で、よかった、素晴らしかったのみで）。もっとユニークな原稿が集められるとよい。
- 専門家ではないのだから、も多角的に物を見たり考えたりした意見を載せてほしい。
- 一貫して前向きの姿勢がうかがえて、よい企画だと思う。
- 会員が高齢化しているので、楽しい人生のための気楽で楽しい研修会を持ってほしい。
- 堅苦しい話ではなく、「わかりやすい」話として歴史を勉強する場を与えてほしい。
- 文化財と称する物がどれだけあるか、具体的に表示して、一般にわかるようにして欲しい。
- 従来どおりの実施でよい。
- 研修旅行は内容がよく、とてもよいと思う。
- 文化財の重要性を会員は勿論一般の方にも認識してもらえるような、「文化財やまと」の編集がなされたらと思う。

三、会の活性化が問題になっておりますが、あなたはどの様にすれば会が活性化するとお考えですか。

- 地味な仕事ですが大切なこと。町の発展のためにも、青壮年層の入会を図り、若返りを考え、活性化に努める。
- 参加しやすいふれ合いの機会を増やすこと。
- 若返りは現状では無理。先輩たちが元気な限り頑張って欲しい。
- 現在若い方も年を重ねればきっと文化財に関心を持ってもらえると思う。
- 何とか若返りを図るべく努力すべきだ。若い会員をもっと積極的に募るようにできないか。
- 班会やら地区集会等で本協会が話題になるように会員に働きかける。
- 当世は社会人の考え方の方向が、現在を楽しむこと。珍しい所へ小旅行することなどが、会員の拡大に導くと思う。

四、その他何なりとご意見をお聞かせください。

- 文化協会との提携・連携を考慮する。

●当協会の活動ぶりを多くの人に知らせるようにみんなで努力するとよい。

・・・・・・・

多くの会員の皆さんから以上のようなご意見を頂きました。当協会の機関誌「文化財やまと」は年一回の発行ですが、今のところ協会と全会員を結ぶ唯一のメディアです。

会員名簿には役職名を記しております。平素お気づきのことは何なりと、お気軽に、役員にお申し出ください。「みんなの会をみんなで盛り立てよう。」を合言葉に、頑張りましょう。

文芸欄

俳句

蓮如忌　黒岩きくゑ

蓮如忌の五百年祭檀家寺

山笑ふ麓の寺の稚児の列

蓮如の忌お練りの朱傘田圃道

山笑ふ稚児の冠直しては

蓮如忌の朱傘のあわい稚児溢れ

北斎館の肉筆展に驚歎して　高橋義一

富士越竜北斎と哄ひ春発てり

北斎の雲竜うらら長野渡く

長蛇逸し春の善光寺数珠鳴れり

矢も刀も折れし千曲川残り鴨

春日暈アルプス煌々万歳す

雪解川白山の竜が漕ぎ出づと

旅疲れ北斎の竜と春眠す

稚児　桑田和子

山峡の雅楽を守り田を植うる

鶯や聖の除幕待つ日和

稚児お練り田園草の芳しく

御遠忌の堂縁磨く春一日

稚児三たり連れて参じる蓮如の忌

蓮如忌　井俣初枝

辞儀をして練りゆく稚児に花吹雪く

算千築のひゞき寺苑の桜かな

蓮如忌や宿坊善男善女の輪

花明かり辞儀せし稚児に朱傘映ゆ

蓮如忌や心みたせり御文書

短歌

古今伝授の里（旧作より）

土松新逸

うつし世の若き力によみがえり
古今伝授の里栄えゆく

古今伝授の里よみかえりしわが郷
土亡師よ亡友よご照覧あれ

遠おやの声きこゆなり古今伝授の
里成りてゆく土に立ちたり

記念館に数多の遺物並びたり発掘
調査の日々を思うも

若きらの力に町の栄えゆくみつつ
し老いのいのちもはずむ

村瀬弥一

テロの眼に歯には歯をぞと牙むけ
ば永遠の平和夢消ゆるべし

聖戦と召されて予科練若人は
恋心秘めて火の玉と散りし

ひた向きに恋心秘めて青春を
召されて華国の地をかけめぐりし

ゆめ起こしジャズの祭典高原の
いきもひそめる森羅万象

あどけなき孫の笑顔に祖父母らは
相好くずしていとも優しく

史は杳として

矢野原幸子

千人塚の方円ここともかしことも
史は杳として雪の起伏へ

ゆるゆると遊びせんとや牡丹雪
空のまほらの仄あかりして

夕焼けがまっかに燃えて地水火
風空五輪北へかたぶく

いつかみた夢のつづきかもしれぬ
越の漢（をとこ）の妻恋の唄

昨日にも明日にもとどかぬ鐘ひとつ
うつそこにうつ鐘があるから

空缶を拾いつつ思う敗戦の缶蹴り
遊びの缶のなき日を

火を放ち櫓に駆ける文楽の木偶の
心の乱れが見える

かしゃかしゃとつらつら椿つらな
りてドアーの取手に土鈴となれり

腹這いになりて口寄す谷川に夏雲
白く色のすみたり

つらつら椿

井俣初枝

仕ぐさにも怒り顕ち来て草取りの
手もとに峡の暮色せまりぬ

平成十三年度　事業報告

4月12日(木)　執行部会開催（役員会・総会の事案）
5月22日(火)　郡上文化財保護協議会理事会
24日(木)　執行部会（役員会の事案）
6月1日(金)　監査会、役員会（総会の事案他）
16日(土)　文化財収蔵展示館建設促進委員会
17日(日)　郡上文化財保護協議会町村文化財巡り、本会からの参加者19名
和良村歴史資料館、からくり実演等
（午後一時より）
22日(金)　総会。会務・会計報告、監査報告、役員改選、創立三〇周記念事業実施承認、◎研修会（講演会の開催）二〇・四五～二一・三五
講師：大和町長　旗　勝美氏、演題：大和町の町政について（出席者29名）
会報「文化財やまと」第26号の発行
6月26日(土)　大和町長、大和町議会議長に宛て「文化財収蔵展示館」建設実現の請願書を提出
27日(金)　町議会議長森藤雅毅氏より、議会において採択され、今後研究調査にあたっては、文教社会常任委員会に依頼した旨の回答を受けた。
7月2日(月)　書記・会計事務引継ぎ（一九・三〇～）於：佐藤宅
5日(木)　執行部会の開催（役員会の事案）
11日(水)　役員会の開催　（出席者17名）
1、東氏館跡庭園池泉等の清掃及び阿千葉城跡の清掃作業
2、大和町文化財保護協会創立三〇周年記念事業について
3、組織の活性化について
20日(金)　東氏館跡庭園池泉等の清掃及び阿千葉城跡の清掃管理作業の実施、参加者（東氏館跡：28名、阿千葉：8名、合計36名）
8月7日(火)　薪能協賛および文化財関係の来客に対応
9月3日(月)　三〇周年記念事業委員会、事業計画の決定等
27日(木)　執行部会の開催、役員会・文化財試写会について
10月2日(火)　役員会の開催、町民祭への参加、研修旅行の計画、会報編集委員会
9日(火)　研修旅行委員会　日帰り研修について
15日(月)　「GIS古今伝授の里　大和町の文化財」試写会
来賓　町長さん以下22名、役員18名（2階　防災研修室において）
27(土)・28(日)　「GIS古今伝授の里大和町の文化財」発表、見学者約120名
11月8日(木)　日帰り研修の実施、（千本釈迦堂、三十三間堂、京都国立博物館）参加者35名
12月7日(金)　役員会、記念事業CDの寄贈先24、一般頒布二五〇〇円（送料込み）、年末役員会開催計画、その他
22日(土)　役員会　於：やまつじ和室、参加者
2月15日(金)　研修旅行委員会（目的地・実施期日の計画・立案）
25日(月)　役員会「春の1泊研修、その他）
3月24日(日)～25日(月)　長野県文化財視察と上山田温泉（参加者39名）
国宝松本城、重文前山寺三重塔、国宝安楽寺八角三重塔、川中島典厩寺、真田宝物館・真田邸・文武学校、豪商の館田中本家ほか
25日(月)　会報「文化財やまと」編集委員会

●今年度内会員物故者
武田信康さん　謹んでご冥福をお祈りします。

平成十四年度　事業計画

4月15日(月)　「文化財やまと」編集委員会
アンケートの実施について
原稿依頼について
研修旅行委員会（東大寺展観覧計画）
5月2日(木)　執行部会、役員会提出議題について
6日(木)　監査会、役員会
10日(金)　平成13年度会務・決算報告について
平成14年度事業計画・予算案について
平成14年度総会について
東大寺展観覧について
会費徴収について
30日(木)　「文化財やまと」編集委員会
6月5日(水)　東大寺展等観覧
21日(金)　平成14年度総会
会報「文化財やまと」発刊
（期日未定）　◎郡上文化財保護協議会町村文化財めぐり（明宝村）
7月　日　執行部会
28日(日)　東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃管理作業
8月7日　薪能協賛
9月　日　第2回役員会
町民祭参加について、秋季日帰り研修について
10月　日　町民祭
11月　日　秋季日帰り研修
12月　日　第3回役員会、事業・会計中間報告、その他
2月　日　第4回役員会、14年度1泊研修について
役員改選について、その他
3月　日　1泊研修の実施

◎以上のほか、本会の目的に参考となる展示会、発表会のイベントには検討の上、計画外でも積極的に参観・参加の機会をとらえることとする。

平成十四年　四月末現在

会員名簿

（順序不同）

― 剣 ―

山下運平（顧問）　八八―二四〇六
籏　勝美（顧問）　八八―二〇三一
村瀬喜八　八八―二一二八
河合俊次（理事）　八八―二二四六
畑中澄子（理事）　八八―二五〇七
畑中定夫　八八―二一六八
小池久江（理事）　八八―二五七六
山下ふみえ　八八―三二二七
加藤正恵　八八―二一〇七
高橋　明　八八―二四八八
日置照郎　八八―二〇七二
加藤文蔵　八八―二八〇二
佐藤光一（会長）　八八―三二〇一
田中　和久　八八―二二〇〇
高橋義一（副会長）　八八―三七九二
河合　恒　八八―二二五八
河合芳英　八八―二二〇四
加藤小弐　八八―二二二九
田仲龍子　八八―二二六一
佐藤八重子　八八―三二〇一
畑中文子　八八―二二四一
畑中初枝　八八―二四七四
新蔵　守　八八―二三七五
高橋叙子　八八―三七九二
野田三枝子　八八―三二六九
岩崎扶美子　八八―三五二一
河合利雄（理事）　八八―三五二〇
河合美弥子　八八―三五二〇
山内　博　八八―三八八六
山内悦子　八八―二一〇三
河合善吉　八八―四〇六四
小池祐二　八八―四〇六四
小池圭子　八八―四〇六四

― 大間見 ―

村井正蔵　八八―二三二三
日置　繁　八八―二二五四
大野紀子　八八―二二三〇
野田英志（理事）　八八―二二八五
清水一作　八八―三〇八六
池田充彦（理事）　八八―三〇九〇
小野江　勉　八八―二七二五
坪井政夫　八八―四〇九二
松井賢雄（理事）　八八―三九九一
古田　忠　八八―四〇九〇
藤代順行　八八―三〇六〇
大野一道　八八―二二三〇
玉木吉郎　八八―三四一五
青木ふじ枝　八八―二二〇三
小野木花子　八八―二七四七
青木ユリ子　八八―三四七七
日置哲夫　八八―四五一九

― 小間見 ―

平沢　勤（理事・会計）　八八―三九三七

― 万場 ―

畑中真澄　八八―二四四一
石神尭生　八八―二四一三
稲葉和巳　八八―二五〇三
黒岩きくゑ　八八―二四六〇
筧　明代　八八―二五三二
三島秋男（理事）　八八―二四六一
桑田和子　八八―二四一九
桑田渥見　八八―二四四六
桑田信夫　八八―二四一八
黒岩弘美　八八―二四五八
井俣初枝　八八―二七五八
青地正男　八八―二四四七
大井静子　八八―二三三八
大井正明（理事・書記）　八八―二八九四
桑田アサ子　八八―二四三九
井上妙子　八八―三五〇八
沢原　勝　八八―三一五〇
山田武司　八八―二四七五
山田和美　八八―三六三一
籏　清子（理事）　八八―四一七〇
山田敬子　八八―三九一七
大井ともゑ　八八―二八九三
井俣赫美　八八―二七五八
三輪孝子　八八―二七八二
桑田守夫　八八―二五一四
大中弘美　八八―三五〇六
大井次子　八八―二八九四
鷲見　務　八八―二六五一

― 徳永 ―

鷲見　清（理事）　八八―二〇〇五
鷲見おと　八八―二一八九
矢野原幸子（理事）　八八―二〇七七
水野志づ子　八八―二六一〇
山内孝一　八八―二六一六
土松新逸（名誉会長）　八八―二七三一
遠藤賢逸　八八―二一二一
渡辺明夫　八八―二六九五
木島三郎　八八―三五九〇
矢野原吉夫　八八―二一三九
村瀬弥一（理事）　八八―二六〇二
渡辺文子　八八―二六九五
遠藤冨貴子　八八―二一二一
山内喜久子　八八―二六一六

― 河辺 ―

清水幸江　八八―二〇一九
清水美佐子　八八―二一〇二
前田　孝　八八―二一一〇
前田　鈴　八八―三六六六
臼田百合子　八八―二〇四六
前田和美　八八―三六六六
岩谷千代子　八八―二一一一
尾藤元子（理事）　八八―二一四七
前田とせ子　八八―二一〇一
岩谷敏子　八八―二〇六三
尾藤　清　八八―二一四七
鷲見長子　八八―二〇二八
熊田冨子（理事）　八八―二六七九

― 神路 ―

森　忠敬（顧問）　八八―二〇八三
臼田宝徳　八八―三七三〇
羽生　清　八八―二二七一
山田真人（理事）　八八―二一一四

― 牧 ―

金子政子　八八―三四二六
滝日準一（理事）　八八―二七〇五
粟飯原常人　八八―二三六二
日置貞一　八八―二六六二
土松貞二　八八―三九八〇
日置　昇　八八―三六三六
遠藤崇史　八八―三六三七
遠藤光平　八八―三九八一
遠藤周一　八八―二八九〇
滝日義一（理事）　八八―三〇六二
滝日　治　八八―三四〇六
田口勇治　八八―三九五〇
加藤一男　八八―二八七〇
清水　定　八八―二七一〇
日置元衛　八八―三四一七
粥川　溜　八八―三三七八
本田欽一（理事）　八八―三一六〇
野田嘉明　八八―三〇四三
尾藤佐紀子　八八―二三五三
滝日和子　八八―三〇六二
遠藤甲子男　八八―三九三五
早瀬ふみ子　八八―三三二七
日置康夫　八八―三七八八
国居利男　八八―三四八二

― 栗巣 ―

島崎増造（監事）　八八―二二三六
増田洋子　八八―四〇四一
筧政之助（理事）　八八―四〇三一

中山周左ェ門　八八－二七二八
鷲見豊夫　八八－二七八八
野田光誠　八八－四〇二七

―古道―

細川　優（理事）　八八－二八六一
清水克巳　八八－二八六二
清水行雄　八八－三九〇八
歳藤堅正　八八－三九七九
清水久子　八八－三九〇八

―名皿部―

有代真一　八八－三七九一
有代和夫　八八－二二〇一
森下正則　八八－三四一三
佐尾チドリ（理事）　八八－三五四四
鷲見昭三　八八－三四三一
永谷正子　八八－二六五四
有代紀子　八八－三七九一

―島―

森藤雅毅（理事）　八八－二六八四
山田長次　八八－三六四八
森　数雄　八八－二五五四
田中　篤　八八－二七九二
奥田昌明　八八－二五二〇
直井篤美　八八－二六二二
此島修二　八八－三六五九
雉野尚子（理事）　八八－三五六四
遠藤利雄（理事）　八八－三五二六
石井敏子　八八－二五〇二
本川喜代士　八八－二八三三
本川清子　八八－三八三三

平成13年度　決　算　書

（収入の部）　（単位：円）

項目	予算額	決算額	増減	摘要
前年度繰越金	76,283	76,283	0	
会費	1,435,000	1,575,000	140,000	
会員費	309,000	308,000	△1,000	正会員 2,000×147名 家族会員 1,000×14名
特別会員費	1,126,000	1,267,000	1,000	日帰研修 7,500×36名 宿泊研修25,000×39名 役員会 22,000円
補助金	100,000	400,000	300,000	大和町より
寄付金	10,000	63,000	53,000	
諸収入	117	7,536	7,419	利子36　CD7,500
合計	1,621,400	2,121,819	500,419	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	決算額	増減	摘要
会議費	35,000	20,073	△14,927	
総会費	1,5000	10,000	△5,000	
役員会費	20,000	10,073	△9,927	
事業費	1,431,000	1,958,336	527,336	
研修費	1,286,000	1,357,211	71,211	日帰研修 311,644円 宿泊研修 1,009,142円 役員会 36,425円 研修助成含
会報発行費	95,000	76,125	△18,875	
事業費	50,000	525,000	475,000	CD作成費用
事務局費	2,000	11,150	9,150	
消耗品費	1,000	6,800	5,800	
通信費	1,000	1,350	350	
旅費	0	3,000	3,000	
会費（県・郡）	84,000	84,000	0	県 64,000円 郡 20,000円
積立金	60,000	0	△60,000	重要資料出版基金の積立
予備費	9,400	14,200	4,800	
合計	1,621,400	2,087,759	466,359	

収入 2,121,819 ― 支出 2,087,759 ＝ 34,060円
（次年度へ繰り越し）

積立金　360,000円（平成7・8・9・10・11・12年度各60,000×6回）

平成14年度　予　算（案）

（収入の部）　（単位：円）

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
前年度繰越金	34,060	76,283	△42,223	
会費	1,625,000	1,575,000	50,000	
会員費	315,000	308,000	7,000	正会員 2,000×150名 家族会員 1,000×15名
特別会員費	1,310,000	1,267,000	43,000	日帰研修 7,000×40名 宿泊研修25,000×40名 役員会 30,000
補助金	100,000	400,000	△300,000	大和町より
寄付金	10,000	63,000	△53,000	
雑収入	7,540	7,536	4	CD売上　預金利子
合計	1,776,600	2,121,819	△345,219	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
会議費	35,000	20,073	14,927	
総会費	15,000	10,000	5,000	
役員会費	20,000	10,073	9,927	
事業費	1,563,000	1,958,336	△395,336	
研修費	1,418,000	1,357,211	60,789	日帰研修 328,000円 宿泊研修 1,060,000円 役員会 30,000円 （研修助成含）
会報発行費	95,000	76,125	18,875	
事業費	50,000	525,000	△475,000	
事務局費	11,000	11,150	△150	
消耗品費	5,000	6,800	△1,800	
通信費	3,000	1,350	1,650	
旅費	3,000	3,000	0	
会費（県・郡）	84,000	84,000	0	県 64,000円 郡 20,000円
積立金	60,000	0	60,000	重要史料出版基金の積立
予備費	23,600	14,200	9,400	
合計	1,776,600	2,087,759	△311,159	

平成13年度の歳入・歳出経理について監査を行った結果、適正に処理されていました。

平成14年5月10日

監事　田口勇次 ㊞
監事　島崎増造 ㊞

編集後記

◇第27号をお届けします。初めての試みとして、編集委員会で編集しました。新機軸を出そうと努力し、その一つとしてアンケートをお願いいしました。多くの建設的なご意見をいただき、心強く思います。一人一人が本会を自分のものと認識し、自分のことと考えてくださる事こそ活性化・発展の基であると改めて強く感じました。

◇これまで本誌は年に1回、総会に合わせて発行して来ました。したがって昨年の総会で決定されたことを、1年後の本誌で報告するという様なチグハグなことになっております。アンケートにもありますように、発行の回数が増やせるよう検討し、ご期待に応えられるよう紙面の充実に努めたいと思っております。皆さんのこれまで以上のご協力をお願いいたします。

◇名簿をご覧になってお分かりのように、今年度11名の新入会員をお迎えすることが出来ました。会にとって大変喜ばしい事です。（さ）

「文化財やまと」第二七号　平成十四年六月一日発行　発行者　大和町文化財保護協会　代表者　佐藤光一　印刷者　白鳥印刷